

信仰と沈黙

牧師 山本 護

漫画では、静寂の画面に「シーン」という擬音が書き込まれます。その影響からか、真面目な話し合いで皆が沈黙してしまった時など、緊張に耐えられずに誰かが「シーン」とつぶやくと、いくらか場がなごんだ感じになります。あの「シーン」は、静寂時に聴こえる耳鳴りの擬音でしょう。

下の田の稲刈りが終わった時期、草刈機を止めて、伝道所裏庭の雑木林で腰を伸ばすと、あの耳鳴りがはっきり聴こえました。「しいんといふ文字書きたすか背戸の秋(拙作)」。花はなく、紅葉にはまだ早く、とりたてて指差すところもない秋の光景に、しばし陶然として「しいん」という耳鳴りを味わっていました。



木々のむこうに礼拝堂。礼拝では、私たちの生きている言葉で主を讃美し、心身に響く母語で主の言葉を読み、耳を澄ませてそれを聞く。裏の林に降りてみれば、「しいん」と耳鳴りが聴こえる沈黙の場がある。なんという絶妙な調和でしょうか。意図したものではありませんが、八ヶ岳伝道所という「場」はそんな配置になっています。

復活されたイエスは、手応えを欲するトマスに言った。「わたしを見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである(ヨハネ 20:29)」。使徒であるトマスはかつて、実際にキリスト・イエスの愛の業を見、救いの言葉を聞いていました。しかし、それを見、聞いただけではまだ半分。「見ないで信じる」ことがその足りない半分でしょうか。

私たちもまた聖書によってキリストを見、神の御言葉を聞いています。それと同時に「見ないで信じる」ことも求められている。キリストは私たちの知覚に働き、同時に知覚には納まりません。秋の林で「しいん」と鳴っている沈黙は、その納まらなさと同関係あるような気がします。「しいんといふ文字書きたすか背戸の秋」。この沈黙の擬音は、言葉に納まらない信仰を、暗示する響きなのかもしれません。Ω